



「飛ぶ教室」を読んで

神宮前小学校 六年一組 徳淵 愛美

私は、しばらく放心してしまった。そして、「飛ぶ教室」という素晴らしい本に出会えたことに心から感謝をした。「この人生では、なんで悲しむかということはけっして問題ではなく、どんなに悲しむかということだけが問題です。」というケストナーの言葉が、私に、忘れたふりをしてい大事なことを思い出させてくれたからだ。

子供の頃の気持ちを忘れないことは、意外と難しいことだ。例え覚えていても、大きくなり知識を身に付けるにつれて、多くの人が心の奥底にしまいこんでしまっているのではないだろうか。しかし、正義先生は違った。ルール違反を犯した少年たちを、彼は闇雲に怒ったりはしなかった。自身の少年時代の辛い経験を踏まえた上で、適切な罰を彼らに与えた。私だったら、彼らがどれだけの思いで規則を破って友を助けにいったのかを考えもしないで、少年たちに、厳しい罰を与えていただろう。また、クリスマスを家族と過ごせないと泣いていた少年も、先生は救った。クリスマスなんて何度でも来る。来年一緒に過ごせばいいのだから、泣かないで等と、私だったら言ってしまっただろう。さらには、少年たちに、「諸君の少年時代を忘れないように！」とお願いをする。大

人が子供にお願いすること自体、なかなかできないことなのに、なんて勇気のある先生なんだろうと私ははっとさせられた。

「お姉ちゃん一緒に遊ぼう」と、おもちゃの線路を組み立てながら言う弟に、「今忙しいから後にして！」と私が答える。途端に、弟のキラキラした目は大粒の涙で満たされる。そのやり取りをくり返す度に、「なんで」そんなことで弟は泣くのだろうと私はいつもイライラしていた。幼稚園の頃よりずっと体も大きくなり、賢くなった私は、いつしか妹や弟と私は違うのだ、あの頃より大人になったのだと思いついていた。しかし、正義先生は、それは私の勘違いだったと気づかせてくれた。弟の「遊んでもらえなくて悲しい」気持ちも、私の「テストの点数が悪くて悲しい」気持ちも同じ悲しみなのだ。今でも、弟は「一緒に遊ぼう」と言ってくる。しかし、弟はもう泣かなくなった。私が弟に「電車さん、3周だけでもいいかな。」の一言が言えるようになったからだ。

賢くなるだけが大人になることではない。私は、今思い返すと恥ずかしいような小さい頃の経験も、感情も、もう隅っこに追いやったりしない。今までの、そしてこれから経験していくことを感じることで全てが私を形作るのだ。いつか大人になった時に、それを生かせる自分でありたいと、心に強く誓った。